

《フィリピン》「ラジャー・ソライマン革命運動」の動向 マニラ首都圏に浸透する“改宗者のイスラム過激派組織”

フィリピンの治安当局は昨年来、“イスラム教へ改宗した元キリスト教徒”で構成されたイスラム過激派組織「ラジャー・ソライマン革命運動(RSRM)」のテロ細胞を捜索・摘発するとともに、その動向に関する諜報活動を強化してきた。当局が、RSRMを特に危険視するのは、メンバーがキリスト教徒の生活様式に精通し、ルソン島の都市部に土地勘があることで、特にマニラ首都圏でのテロ攻撃で格好の実行要員となりうるからである。

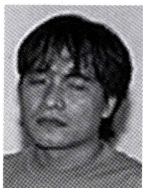
フィリピン国内でテロを実行するイスラム過激派としては、イスラム原理主義集団「アブサヤフ(ASG)」と東南アジアの広域テロ組織「ジュマー・イスラミア(JI)」が国際的にもよく知られている。

しかし、国際テロ問題の専門家などを除けば注目されることは少ないものの、2003年から05年の期間に同国内でASGやJIが首謀した多くのテロ関連事件では、「バリク・イスラム(Balik-Islam)」と通称される“イスラム教へ改宗した元キリスト教徒”が重要な役割を果たしてきた。

こうした「バリク・イスラム」によるテロ活動の母体となっている軍事組織が「ラジャー・ソライマン革命運動(RSRM: Rajah Solaiman Revolutionary Movement)」である。

「サントス兄弟」の逮捕

RSRMは、イスラム名アフメド・イスラム・サントス(Ahmed Islam Santos)ことヒラリオン・デル・ロサリオ・サントス(Hilarion del Rosario Santos)をリーダーとして、1990年代の末期に極秘裏に結成された。



ヒラリオン・サントス

フィリピン治安当局がRSRMのテロ活動を探知し、(後述するように)そ

の本格的な摘発を始めたのは02年であり、その後もテロ関連事案に関与したメンバー多数を逮捕してきた。にもかかわらず、RSRMの存在が一般の注目を集めることが少なかったのは、多くの場合、メンバーはASGやJIが組織したテロ遂行細胞の一部として活動してきたからである。

そのRSRMがASGやJIに匹敵するほど危険性の高い組織であり、特にマニラ首都圏でのテロに関しては実行部隊の主要部分を構成しているという事実は、当局が05年に「サントス兄弟」を逮捕したことが切っ掛けでクローズアップされるようになった。

同年3月22日、治安当局は、首都圏ケソン市クバオ地区でASGの都市テロ細胞に属するダウド・ムスリム(Dawud Muslim: 33歳)という自称“武術師範”の男を逮捕した。同人は本名をタイロン・デル・ロサリオ・サントス(Tyrone del Rosario Santos)、愛称を「デーブ(Dave)」といい、RSRMリーダーであるヒラリオンの多数いる兄弟の1人であることが判明した(当局は、この時の摘発では、ヒラリオンら他の重要メンバーの首都圏からの逃亡を許してしまった)。

しかし、当局が大きな衝撃を受けたのは、タイロンの供述に基づき急襲・捜索した同市フェアビュー地区にあるRSRMのアジトから、起爆装置18個、パソコン1台、ビデオカメラ1台などとともに10の袋に詰められた爆薬600kgが押収されたことである。この爆薬は「2階建てビルを跡形も無く吹き飛ばすほどの威力がある」(マニラ首都圏警察の爆発物専門家)ものだった。

「バリ島型爆弾テロ」未遂事件

治安当局のその後の捜査で、RSRMがこの爆薬を使用し、コードネームを「ビッグバン(Big Bang)作戦」という大規模な爆弾テロを計画していたことが明るみに出た。テロ攻撃の決行時期はキリスト教の聖週間(05年は3月20-27日)から4月初めにかけて。ターゲットは、マニラ市マラテ地区の繁華街、特に西欧人の出入りが多いナイトクラブなどが想定されていた。

当局の発表によると、RSRMは、02年10月にJIが首謀・実行したインドネシア・バリ島でのテロ(日本人2人を含む202人死亡)に類似した大規模な自動車爆弾テロを計画しており、実際に遂行されていれば「バリ島テロ」をも上回る犠牲者が出ていた可能性があった。当局は文字通り「大惨事の発生を間一髪で阻止した」ことになるが、当時は首都圏住民がパニックに陥ることを恐れて、この摘発の成果は強調されなかったきらいがある。

この「ビッグバン作戦」が存在したことは、タイロンの逮捕から7カ月ほどたった10月26日にRSRMリーダーのヒラリオン自身が逮捕され、その供述からも立証されることになった。

同日未明、フィリピン国軍と警察の合同部隊は、ミンダナオ島南西部のサンボアンガ市サンホセ町に潜伏していたヒラリオンを含むRSRMメンバー9人の身柄を拘束したが、同人は治安当局の取り調べに対し「『ビッグバン作戦』が(タイロンの逮捕と爆薬の押

収で)失敗したために、その直後から首都圏を離れミンダナオ島に潜伏していた」と認めたのである。

パレジャ率いる新指導部

フィリピン治安当局は、「サントス兄弟」が逮捕されたとしても「ラジャー・ソライマン革命運動(RSRM)」がテロを実行する可能性が低くなったわけではなく、特にマニラ首都圏でのRSRMによるテロの脅威はむしろ増大したと分析し、その動向に関する諜報活動を強化している。

ヒラリオンの後を継いだRSRMの現リーダーは、その義理の兄弟であるアテ・ジェン(Ate Jen)ことディンノ・アモル・ロサレジャス・パレジャ(Dinno Amor Rasalejas Pareja)で、RSRMは同人を中心に新しい指導部を形成したことが判明している。

パレジャの経歴などに関しては不詳な点が多いが、フィリピンの情報機関関係者によると、ヒラリオンに勝るとも劣らぬ武闘派であり「大規模なテロを実行することが『バリク・イスラム』の使命だと固く信じている」(同関係者)タイプのテロリストである。

また、治安当局がASGやJIに対する摘発行動を強化すればするほど、ルソン島の都市部に土地勘がありキリスト教徒の生活様式に精通したRSRMメンバーが、イスラム過激派のテロ・ネットワーク(特にマニラ首都圏に潜伏するテロ実行細胞)の構成員としてリクルートされていく状況が生じる。当局は、こうしたネットワークに関係している「バリク・イスラム」は現在全国で約400人と推定しており、これがRSRMの活動メンバーを構成するとみている。

それと関連して、RSRMは、このネットワークから資金・兵站・訓練などの面でかなりの支援を受けているのは間違いない。05年10月にヒラリオンらが逮捕された際にアジトにしていたサンボアング市内の民家からは、対戦車ロケット砲弾などの軍用砲弾49発、消音装置付きのM16自動小銃、弾薬、

雷管、パソコンなどが発見・押収されており、RSRMが新たなテロを実行する準備を進めていた可能性が高い。

また、RSRMの連携組織には、ASGやJIだけでなく、現在はマレーシア政府を調停者にしてフィリピン政府と和平交渉を行っている、フィリピン最大のイスラム反政府組織「モロ・イスラム解放戦線(MILF)」の強硬派も含まれているとみて間違いない。

ヒラリオンは「『ビッグバン作戦』の失敗で首都圏から撤収した直後、ミンダナオ島中部マギンダナオ州タラヤン町にあるMILFの拠点に潜伏していた」と供述していることがその傍証である(MILFスポークスマンは「ヒラリオンを匿したのはMILFではなくASGだ」として、RSRMとの関係を否定するのに躍起となっている)。

“創設者”

ヒラリオン・サントス

RSRMの“創設者”、ヒラリオン・デル・ロサリオ・サントスはルソン島(イロコス地方)パンガシナン州アンダの出身。1991年に出稼ぎ労働者としてサウジアラビアに半年間余り滞在したが、帰国直後にカトリックからイスラム教に改宗しアフメド・イスラム・サントスと“改名”した。タイロンを含む2人の兄弟が改宗したのもその直後である。

99年8月、ヒラリオンは2人の兄弟を伴ってミンダナオのMILF支配地域にある「アバカル基地」を訪れ、ハシム・サラマツMILF議長(当時：03年7月に病死)と会見し、「バリク・イスラム」グループに対する資金・武器面での支援を要請した。

ヒラリオンが、中部ルソン地方のマドラサ(イスラム神学校)の教師や学生を糾合するイスラム原理主義運動の軍事組織としてRSRMを結成したのは、この頃だとみられている。

同人は01年12月には、ミンダナオ島中部の南ラナオ州にあるMILFの「バシュラ基地(Camp Bashra)」で銃器の扱いや爆弾製造に関する訓練を受けた。

情報関係者によると、ヒラリオンは

同年、RSRMのフロント(合法)組織としてイスラム系の非政府組織(NGO)を設立し、02年までラジオやテレビを通じて積極的な宣教活動を展開した。

治安当局がこのNGOの原理主義的な教義を危険視し、その背後にあるRSRMを監視・摘発するようになって以降の関連事案は下記の通りである。それは、RSRMがフィリピンにおけるイスラム過激派のテロ・ネットワークで台頭してきた経緯を示している。

テロ関連事案(時系列)

【2002年4月】国営電力会社襲撃未遂事件

アブドル・ハキム(Abdul Hakim)とアニス・トリニダード(Anis Trinidad)率いるRSRMのテロ部隊が、パンガシナン州スアルにある国営電力会社(NACOPOR)の施設をロケット砲と爆薬を積載したラジコン機を使って攻撃しようとしたが、同月25日に偵察メンバーが警察の監視網にかかったために未遂に終わった。

【2002年5月】ルソン島中部のアジト摘発

(中部ルソン地方)タルラク市警察は、同市内の商業地域で複数の手榴弾を同時に爆発させるテロ計画を実行しようとしていたRSRMメンバーのハリド・アミル・トリニダード(Khakid Amir Trinidad)をバスターミナルで射殺し、オマル(Omar)ことデクスター・マユノ(Dexter Mayuno)を逮捕した。

その後の捜査に基づき、警察はパンガシナン州アンダ、およびタルラク州サンクレメンテにあったRSRMのアジト数カ所を急襲・搜索し、構成員数人を逮捕するとともに、爆弾テロ計画のために準備したとみられる爆薬や銃器を押収した。

【2003年3月】首都圏の偵察要員逮捕

同12日、公安警察は、テロ計画のためにマニラ首都圏の戦略的に重要な地区の下見を行っていたRSRM幹部のアフマド(Ahmad)、本名マリアノ・ロマルダ(Mariano Mutia Lomarda)をタギグ市内で逮捕し、手榴弾2個などを押収した。同人は02年のタルラク州での摘発を逃れ指名手配になっていた。

ロマルダは「バリク・イスラム組織会議(Balik-Islam Unit Congress)」の幹部でもあり、警察の取調べに対して「ルソン島内にシャリーア(イスラム法)が導入されたイスラム都市を確立するのがR S R Mの目標のひとつである」と供述した。

【2004年2月】フェリー爆破・沈没事件

同27日、マニラ湾を航行中の「スーパーフェリー14」(1万トン)が火災を起こした後に沈没し、死者・行方不明者116人を出す大惨事となった。政府の調査チームは当初、火災は「事故または若者の悪ふざけが原因」と発表していたが、後に治安当局は事件がA S Gの都市細胞が仕掛けた時限爆弾によるテロだと断定した。これは東南アジアでは02年の「バリ島爆弾テロ」に次ぐ死傷者数を出す凶悪なテロ事案となった。

当局は同年中に同細胞のメンバー8人を逮捕したが、フェリー爆破の実行犯と自白したアフマド(Ahkmad)またはハビル(Habil)ことレドンド・カイン・デロサ(Redondo Cain Dellosa)ら同細胞の主要な構成員は「バリク・イスラム」だったことが判明した。

【2004年3月】A S G-R S R M連携

治安当局は同月末、マニラ首都圏で大規模な爆弾テロを計画していたA S Gのテロ細胞メンバー6人を逮捕し、T N T火薬36kgなどを押収した。国際テロ問題専門家の一部では、このテロ計画の背景には国際テロ組織「アルカイダ」とJ I、およびA S Gの連携があり、直前の3月11日にスペイン・マドリードで発生した列車同時爆破テロ(191人死亡)と連動した計画だったとの指摘が出た。この時も、当局は「最も危険なテロリスト細胞」(アロヨ大統領)による爆弾テロを瀬戸際で阻止したことになる。

実は、同細胞もリーダーのアルハムセル・マナタド・リンボン(Alhamser Manatad Limbong)、通称「コソボ(Kosovo)」以下の主要メンバーは「バリク・イスラム」であり、実態はA S Gと連携する「R S R Mの都市細胞」だった。

リンボンが所持していたメモに書かれていた同計画の“攻撃対象候補”の大半

は首都圏マカティ市に集中しており、マカティ・シネマ・スクエア、ザ・ランドマーク、ルスタング、S Mモールズ、グロリエッタなどのショッピングセンターや高級デパートなどだが、複数の大使館やマンダルーヨン市のフィリピン証券取引所なども挙げられていた。

【2005年2月】バレンタインデー同時多発テロ

2月14日のバレンタインデーに、首都圏マカティ市とミンダナオ島のダバオ市、ヘネラルサントス市の計3都市で同時多発爆弾テロが発生し、計8人が死亡、150人以上が負傷した。マカティ市のテロでは、幹線道路を走行中の路線バスが爆発(4人死亡)したが、国家警察は3月までにアブ・ハリル(Abu Khalil)、本名アンヘロ・トリニダード(Angelo Trinidad)ら“A S Gメンバー”3人を逮捕した。



アンヘロ・トリニダード

この“A S Gメンバー”の実態も、トリニダードらは「ハリド・トリニダード人民解放軍(H K T : Hukbong Khalid Trinidad)」と名付けられたR S R Mのテロ部隊に所属していたことがわかっている(H K Tの名称は、02年のタルラク市での事件で、警察に射殺されたハリド・アミル・トリニダードに因って付けられたのは明らかである)。

これら一連の事案を経過して、前述した治安当局による「サントス兄弟逮捕事件」に至るわけである。

地元メディアの報道でも、個々の容疑者や関係者の宗教的背景にことさら言及しないために、テロ関連事案と「バリク・イスラム」の関係に特に関心が払われることはない。しかし、実際には、上述した代表的な事案以外にも、R S R Mに限らず「バリク・イスラム」が関与している事案はかなり多い。

また、そうした報道で、J Iあるいは

A S Gのメンバーなどと特定されていても、実際には首謀組織のテロ実行要員としてリクルートされたR S R Mメンバーである場合も見受けられる。「サントス兄弟」のように、イスラム名の通称とスペイン系の本名を持つイスラム過激派メンバーなどはほとんどが「バリク・イスラム」だとみなして良いだろう。

「イスラムへの回帰」

治安当局がJ I、A S Gと同レベルでR S R Mのメンバーを危険視するのは、既に詳述してきたように、①(ミンダナオ島を中心とする他のイスラム過激派と異なり)拠点地域がルソン島北部・中部にあり首都圏に土地勘がある、②キリスト教徒の生活様式に精通しており首都圏に潜伏しやすい、という理由の他に、③生来のイスラム教徒よりもイスラム原理主義に狂信的に傾倒するものが多い、という点が挙げられる。どの宗教に限らず、“改宗者”が急進的な実践活動を行うのは一般的な傾向である。

「バリク・イスラム」とは「イスラムへの回帰」を意味するが、R S R Mメンバーにとっては、16世紀にスペイン植民地の首都となる以前のマニラに存在したイスラム社会に文字通り“回帰”し、それを再建することが究極の目標である。

マニラにおけるイスラム社会の最後のスルタンとなったラジャー・ソリマン(Raja Soliman)の名を組織名に冠しているのは、なによりもそうした宗教的信念の表明だといえる。

カトリックが多数派のフィリピン(人口8,300万)でイスラム教徒人口は最大に見積もって670万人だが、特に「バリク・イスラム」の増加は顕著であり、現在では50万人に達するとの見方がある。しかも、その多くはルソン島などキリスト教徒が多数派の地域に居住している。

もちろん、「バリク・イスラム」でR S R Mなどの過激派に参加している者はごく一部にすぎないが、治安当局者が「『バリク・イスラム』のテロリストは我々のリビングルーム(マニラ首

都圏)にもいる」という危機感を抱くに
至ったのも故なきことではない。

フィリピンの情報機関が05年9月に入
手した機密情報によると、東南アジア
の広域テロ組織であるJ Iは、同国内
での活動拠点をミンダナオ島周辺だけ
でなく、他の地域でも構築する計画を
推し進めている。

マニラ首都圏をはじめ、イロコス、
中部ルソン、カラバルソン、ミマロパ
(特にパラワン島南部)、ピコールなどキ
リスト教徒が多数派を占める地方が対
象地域で、アジトや「作戦センター」
を設置するための新しい構成員を「バ
リク・イスラム」からリクルートしよ
うという計画である。

そのため、国家警察はこの情報に基
づき、各州・市警察本部に対して、管
轄地域内でJ IやR S R Mのメンバー
またはシンパになる可能性がある「バ
リク・イスラム」のリストを作成し、
その動向を監視するようとの通達を
出している。

国際的連携と歴史的沿革

フィリピンの「バリク・イスラム」
過激派問題では、国際的な広がりや歴
史的な沿革にも注視する必要がある。

現在、アラブ諸国にはフィリピン人
の出稼ぎ労働者が多数在住しており、
サウジアラビアに約100万人、その他
の湾岸諸国には約160万人と見積もら
れている。そうした労働者の3分の1はマ
ニラ首都圏をはじめとするルソン島の
出身者でキリスト教徒が多い。

実は、R S R Mの創設者、ヒラリ
オン・サントスがそうであるように、
イスラム原理主義を信奉するようになった
過激な「バリク・イスラム」の多くは
“湾岸帰り”の改宗者が多い。紛争解決を
支援する非政府組織(N G O)「インター
ナショナル・クライシス・グループ(I
C G :本部=ブリュッセル)」は「湾岸
諸国からの帰国者のグループは、『バリ
ク・イスラム』の中でも思想性の高い活
動家の重要な供給源となっている」と分
析している。

一方、国際テロ組織「アルカイダ」
は、こうしたフィリピンの特異性に着
目し、早くから「バリク・イスラム」
の獲得に狙いを定めた活動を行ってき
た。「アルカイダ」を率いるオサマ・
ビンラーディンの義理の兄弟、モハメ
ド・ジャマル・ハリファは1980年代後
半からフィリピンに滞在し、当初はミ
ンダナオ島の過激派分子をアフガニス
タンでの軍事訓練に送り込む任務に従
事していた。

しかし、90年代に入ると、国内での
開発・教育・医療プロジェクトを実施す
るようになり、93年までに「ダルル・
ヒジャラ財団(Darul Hijra Foundation)」
を設立し貧困層での宣教・改宗活動にも
力を入れるようになった。

また、94年から95年にかけて、ク
ウェート国籍の「アルカイダ」ナンバー
3、ハリド・シェイク・モハメド、お
よびその甥のラムジ・ユーセフ(93年2
月に起きたニューヨーク世界貿易セン
タービル爆破事件の首謀者)がマニラ首
都圏に「アルカイダ」の細胞を構築し
ていた時期に、両人は「バリク・イス
ラム」のリクルート活動を側面から支
援した(ハリドはその後、01年の米同時テ
ロ〔「9・11テロ」〕で実行犯とビン
ラーディンを繋ぐ「オルガナイザー」と
なったが、03年3月にパキスタン国内
で逮捕され、現在は米治安当局の拘留下
にある。ラムジは米国内で終身刑判決を
受けて服役中)。



ハリド・シェイク・モハメド

「ダルル・ヒジャラ財団」は、「アル
カイダ」やJ Iの海外組織などからの
資金を合法的にフィリピン国内に持ち
込むことを目的としたイスラム過激派
のテロ・ネットワークにおける“フロン
ト組織”であり、R S R Mの結成やその
後の活動にも資金を提供してきたとみ
られている。

国際レベルでの課題

R S R Mの動向に代表される「バ
リク・イスラム」過激派への対応は、
フィリピン国内だけでなく、東南アジ
ア全域、さらには世界レベルでのテロ
対策上の課題でもある。

テロ対策での宗教・思想的な側面を
重視しているシンガポールのウォン・
カンセン内相(当時：現副首相兼内相)
は、05年4月に同国の情報機関幹部に
対して行った訓辞の中で、「アルカイダ」
やJ Iなどの広域テロ組織は、欧州連
合(E U)加盟国の国籍を持つ「バリク・
イスラム」をテロ攻撃対象国に入国さ
せ、偵察や資金調達などの活動に従事
させていると警告した。

それに関連して、日本でも有名に
なった「バリク・イスラム」のテロリ
ストに、「アルカイダ」傘下組織の幹
部でJ Iとも関係があったリオネル・
デュモンがいる。

デュモンはアルジェリア系フランス
人で、02年7月から03年9月まで計4
回日本に出入国していたことが公安当
局によって確認された。最初の入国は
シンガポールからで、最後の出国先は
マレーシアであり、一時期インドネシ
アに滞在していたことも判明している
(03年9月にドイツの治安当局に逮捕さ
れ、後にフランスに移送された)。

こうした事実は、東南アジア全域の
テロ・ネットワークでも「バリク・イ
スラム」が重要な役割を果たしている
ことを示唆している。

デュモンは一時期、新潟に居住してい
たが、端正な顔立ちで物腰も柔らかく、
彼と知り合った人々の多くが「真面目なキ
リスト教徒」と信じて疑わなかったので
ある。ここにも、R S R Mメンバーのマニラ
首都圏での潜伏活動に共通するテロ対策上
の問題点が象徴的に示されている。

ウォン内相ら各国の治安機関関係者
もこうした「バリク・イスラム」の過
激派メンバーは探知が難しいことを認
めている。

(アジア・リンケージ 勝田 悟)